

山下おんがくよもやま話

東京の音楽会場でもらったチラシの中に、あらかわバイロイトなるワーグナーのオペラ公演を発見、びっくりしたが、この団体は今も存続しており、別にシヤレでもジョークでもなかったのだ。

実は関西圏にも驚くべき成果を、着々と積み重ねているカンパニーがある。こちらは格別何も謳ってはいないが、昨年まではさしずめ川西ベルガモでも名乗ってもおかしくない、ドニゼッティのシリアスなオペラ3年連続公演を成功させた。何しろ500人の小ホールだ。

外国人歌手を呼ぶものでもない。日本人歌手をオーディションして、ダブル・キャストで2公演。大阪市にあらず、兵庫県川西市のみつなかホールで、年1回、もう22年も続いている。(ここ数年特に気合

オペラに取り組む心意気

(441)

が入って来た。

今年からはイタリアのベルカントの天才ベッリーニの難曲オペラの3年企画が始まった。まずは「カプレーティとモンテッキ」。これだけでは何のオペラか意味不明だろう。シェイクスピア原作ではない「ロメオとジュリエット」のお話だ。え、そんなものがあるかって？ これはイタリアでは有名なお話なのだ。いけば本歌である。

ロメオ役はメゾ・ソプラノが歌う。ズボン役一男役だ。ふたりは既に恋仲なので露台の場は無い。女声両役はよく歌った。プロとしては当然だが、これはハードルの高いオペラなのだ。特筆されるべきは牧村邦彦さんの指揮で、その入念で肌理の細かな表現は、美しいベッリーニの音楽をたっぷりと聞かせた。

井原広樹さんの演出も冴えた。装置、衣裳もよろしく、スタッフ・ワークは万全だった。9月22日所見。

(演劇プロデューサー)